

子育て期の親のためのコミュニケーションプログラムのあり方

NPO法人GGPジェンダー・地球市民企画 代表理事 岩丸明江

はじめに

人権に関する研修や講座のプログラムデザインは、非常に工夫を要する面がある。「人権を学ぶ」ということで、ことさら生真面目に構える傾向もある。また、押しつけではなく、学習者が内発的な気づきを高めるために、学習者の特性を意識して、内容を考えることを必要とする。そのような学びの場を創造するためにどのような要件が必要か、今回企画・主催した4回連続講座のふりかえりから考えてみた。

当NPO法人GGPジェンダー・地球市民企画は、性別にとらわれず、ひとりひとりがあるままの自分として生きていけるよう、人権や地域づくりの様々なワークショップを開催している。平成21年度、北九州市立男女共同参画センター‘ムーブ’の共催を得て、子育て中の市民を対象として、「子育てママ・パパのコミュニケーション・セミナー」を開催した。コミュニケーションとはいうものの、正確には、コミュニケーションの根幹を為す、人権意識について多くの時間をあてている。企画書には、「子育て中だからこそ、子どもにむきあったり、関係づくりを促進するためにコミュニケーションについて学ぶ機会が重要である」と企画意図を書いた。

1. プログラム概要

- 対象：0～9才までの子どもを子育て中の方
- 日時：平成22年2月～3月 全4回 10：00～12：00
- 会場：北九州市立男女共同参画センター‘ムーブ’
- 定員：15名（16名参加 出席率 87.5%）
- 呼びかけ文

【子育て中の今だから！

コミュニケーションの大切さを、ひとつひとつ見つめてみませんか？

ゲームやグループワークなどを通して、参加者同士わかちあいながら学びます。

カフェタイムも含め、ほっとするひととき。ぜひご参加ください！】

■プログラム

	日時&タイトル	内 容
第1回	*オリエンテーション 子育て中の今だから！ Let's コミュニケーション	はじめてでも安心！参加者同士、様々なゲームやワークを通して、コミュニケーションに関する気づきを深めていきます。毎日がバタバタと忙しいあなたのための、〈ほっと&新鮮〉なひととき。
第2回	セルフエスティームって なあに？	人が活き活きと生きていくのに、「セルフエスティーム＝自尊心」はとても大切な概念です。セルフエスティームとは何かを知り、それがゆらぐときのケアについて考えてみましょう。
第3回	ジェンダーを考える ～女の子・男の子、 どう育てよう？	残念なことに、性別役割分担意識は、まだ私たちの社会の様々な場面にあります。でも、これからの女の子・男の子は、20世紀（！）とは違う世界に育っていくみたい…。楽しくて&びっくりのワークを通して考えます。

第4回	伝えるスキル ～アサーションとは？	伝えたいのに、うまく伝えられなかった体験、ありませんか？ 自分も相手も大切にできる表現スキル【アサーション】を学び ましょう。
-----	----------------------	---

2. 第1回 仲間づくり

「子育て中の今だから！ Let's コミュニケーション」と題して、様々なアクティビティ（活動）を体験する。第1回は下記3点を特に大切にする。

1) なによりも「楽しい」と思えること

日頃は、子育てで忙しくしているので、託児をすることで大人だけの時間を持ち、なにかにじっくり取り組める時間が自然に貴重と思えるようである。カフェタイムも用意し、自己紹介なども丁寧に行い、安心した場づくりをする。

2) ワークショップという参加型学習の方法に親しむ

ワークショップでは、体験にもとづくこと、ふりかえりという内面的省察を大事にすることを伝える。また、学びの場を安全なものとするために、「正解はないこと」「互いの意見をありのままに受け止めあい、批判はしないこと」をルールとして共有する。

3) 全体的なプログラムデザインを理解する

全4回の概要を展望し、コミュニケーションのポイントである、各回テーマ「セルフエスティーム」「ジェンダー」「アサーション」を参加者が互いに助け合いながら考える場をつくることを共有する。

第1回は、このほかに「聴く」（アクティブ・リスニング）にまつわるアクティビティをいくつか体験し、「聴く」スキルが第2回のセルフエスティームと大きな関連があることを伝える。

3. 第2回 セルフエスティーム（自己肯定感）について

セルフエスティーム（＝自尊感情、自己肯定感）は、「生きる力の根っこ」であり、わたしたちは、もともと「生きる火種」をもって生まれてきていること、にふれる。これは「人間はみな生まれながらにみずみずしい個性、感性、生命力、能力、美しさを持っている」というエンパワメントの思想に裏打ちされている。

図1左は、「本来のわたし」であり、人種や性別、障害の有無に関わらず、ひとりひとりがかけがえのないすばらしさを持って生まれてくる。それが、図1右のように、社会からの様々な不要な働きかけによって、その根っこが損なわれてしまう。

しかし人権意識そのものである「ありのままの自分を大切に思える心」（セルフエスティーム）をしっかりと確認し保持していくことで、様々な外圧や、内なるしめつけから自分を守ることができる。

この、セルフエスティームは、しっかりとありのままの自分を受け止めてもらい、聴いてもらうことで、支えられる。

セルフエスティームについて、「聴く」ワークを体験しながら、いくつかの特徴をおさえていく。

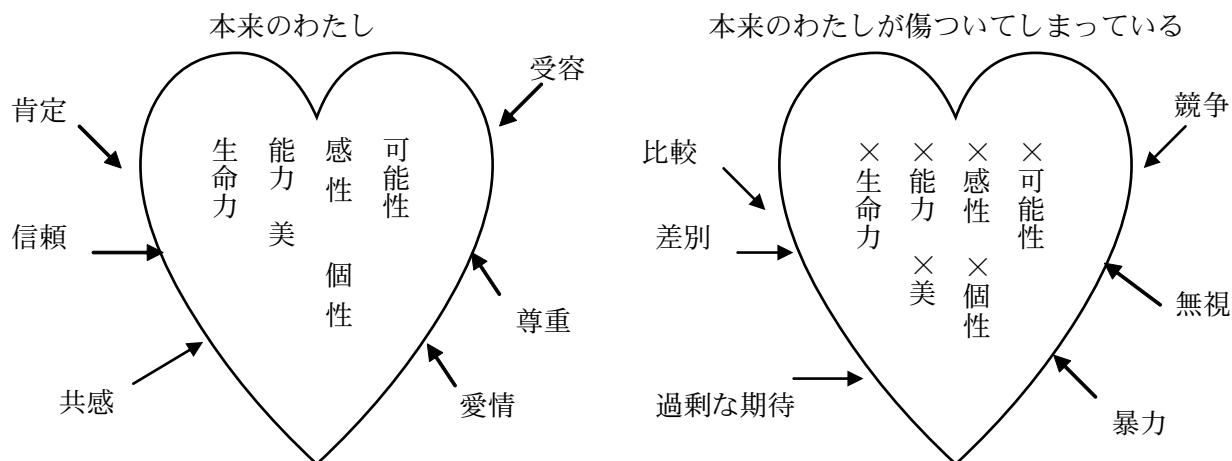


図1 本来のわたしと傷ついているわたし
 (『エンパワメントと人権』 p21より)

1) 「聴く」ワーク

「聞く」でも「訊く」でもなく、「聴く」時に大切なこと

- ・目の前にいる人に全ての関心をそそぐ
- ・暖かいまなざし
- ・うなづく
- ・共感
- ・ひみつを守る

2) セルフエスティーム (=self esteem 自尊感情、自己肯定感) とは何か？

- ・自分自身の気持ちに気づいている
- ・自分の価値に気づく (欠点だと思われることも含めて)
- ・ありのままの自分を認める
- ・自分を好きになる
- ・自分を大切にできる
- ・今までも含めて、今の自分を認めることができる

セルフエスティームは〈無条件〉……ひとりひとりが無条件に大切にされることである。

これに対して 自己効力感 (セルフエフィカシー) は、「〇〇ができるからえらい／すごい」と〈条件つき〉である。

*セルフエフィカシー (self efficacy 自己効力感) とは、『自分が、ある具体的な状況において、適切な行動を成功裏に遂行できるという予測および確信』

〈カウンセリング辞典〉。

3) 自尊感情が高い時／低いとき (HEAL研究所所長 金香百合さん作成)

高いとき	低いとき
1 前向きで好奇心が旺盛	1 後ろ向きで否定的・消極的
2 人との関係は対等、差別や偏見が少ない	2 強い者には従い、弱い者には支配的
3 変化に強い	3 変化に弱い
4 違いを楽しむ	4 違いを排除
5 ～らしさに縛られない	5 ～らしさに縛られる
6 自分の頭でまず考える	6 人の考えを気にしてふりまわされる
7 自分の短所、失敗も受け入れる	7 短所や失敗をかくす

自尊感情は、いつもいつも高いわけではなく、いろいろな力で脅かされることもある。

自分の気持ちに気づき、必要なときは、ケアすることがとても大切である。自尊感情は、残念ながら、いろいろな「外からのパワー」や「内なるしめつけ」で、脅かされることを知っておき、自分なりのケアの方法やサポートの在り処を知っておくことが必要であることを伝える。

4. 第3回 「ジェンダー」を考える

1) ジェンダーとは

ジェンダーとは「社会的（につくられた）性別」であること、それは地域、国、時代によって違うものであるので、「変えることができる」ことを確認する。

方法としては、国内や国外の法律的・政治的なジェンダーの変化をたどるワークを行ったり、様々な文献を読みあわせするなどして、概念を確認していく。

セックス／sex……生まれつきの生物学的性別

ジェンダー／gender……「社会的性別」通念や慣習の中にある社会によって作り上げられた「男性像」、「女性像」。(地域、国、時代によって違うもの。「社会的性別」は、それ自体に良い・悪いの価値を含むものではなく、国際的にも使われている概念であること)

日本は「同調圧力」がはたらく社会であり、「みんないっしょ」が好きな傾向があるため、ジェンダーに敏感になること、『自分らしい生き方をはばむジェンダー』とは何かを、考える機会を多くもつことが外圧を意識することにつながることを伝える。

「男は仕事、女は育児・家事」などの性別役割分担意識が生じやすいのは、①生物学的な違いを拡大解釈しがち、つまり〈女性は妊娠や出産の可能性がある→「女性は育児や家事に向いている」〉、あるいは、②平均値を拡大解釈しがち、つまり、〈男性の握力の平均値は女性よりも高い→「男は強い」「女は弱い」〉などの考察も紹介する（ムービング Vol.58号 奥山和弘さん 資料より）。

その上で、女の子、男の子を育てている親として、わたしたちは、ほんとうにひとりひとりの「個」をみつめているだろうか？と投げかけ、考えてみる。

2) ジェンダーのもたらす問題

具体的にジェンダーのなにが問題なのかをみていく。

① 自尊感情への影響

国際比較では、日本の子どもは自尊感情が低い。

「多くの調査で女の子の方が自尊感情が低いという共通の結果が得られている……女の子の方が女の子らしくするように我慢を強いられることが多い、という環境的な要因もある」～『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 児童精神科医の現場報告』古荘純一 光文社新書 2009 より

② デートDV、性感染症の発生

近年、大変多くのデートDVの講座が開催されている。ジェンダーのとりわれが強いほど、デートDVが発生しやすいことが調査から確認されている。(平成18年度 ジェンダー問題調査・研究支援事業 報告書『北九州市における デートDVの実態と意識に関する調査研究～より早い時期からの啓発・予防のために』) さらに、メディアにおける性の影響が強く、それらの性情報には、非常にジェンダーの偏りがみられる。(参考：NPO法人SESN 『マンガ・雑誌の性情報と子どもたち』08年) 子どもたちには性や恋愛に関わる様々な固定観念、思いこみがある。子どもたちの性情報の入手先は、多くが友だち、雑誌であるが、雑誌には下記のような特徴がある。

- ・性についてのマイナスイメージ→ 「知りたくない」「エロイ」「いやらしい」
- ・男の子がリードするもの
- ・暴力の容認
- ・避妊に関しては 男子は関心が低い
- ・恋愛観、パートナーシップがステレオタイプ

③ 自殺者は 98年以来、毎年 3万人以上

一日に90人以上自殺しており、その7割は中高年男性である。男性は「相談」しにくく、経済的な問題を背負いやすい、という特徴がある。もちろん、賃金における男女差もこの問題の背景にはある。

3) 子どもたちの未来のために大人が考えたいこと

北九州市でも、性別で役割分担することを、支持する人は全国調査よりも多い。

(H17年度 北九州市男女共同参画推進部調査)

「社会通念・慣習・しきたりなど」では8割近くの人が男性の方が優遇されていると考えている。「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という考え方についても、【賛成】【どちらかといえば賛成】は、計57.5% (全国調査 45.2%) という結果である。

しかし、子どもたちの未来のために、ひとりひとりの個を大切にするためには、ジェンダーに敏感であることが大切であること、無意識に「女の子なんだから」「男の子なんだから」と言う言葉かけが、ジェンダーの役割意識をつくりだすことを確認する。

【未来を生きる子どもたちへの関わり方として大事にしたいこと】

- ・肯定的に受け止め、よく話を聴く
- ・その子自身を見つめる

- ・メディアリテラシー（メディアの影響を見抜く力）を持つ

5. 第4回 伝えるチカラ アサーションを知る

1) コミュニケーションには、マイナス・プラスの連鎖がありうる

コミュニケーションについて苦手意識があると【自身欠如】のまま、【不適切な言動】をしてしまい、【動揺・不安】を持ったまま、さらに【自身欠如】になっていく。

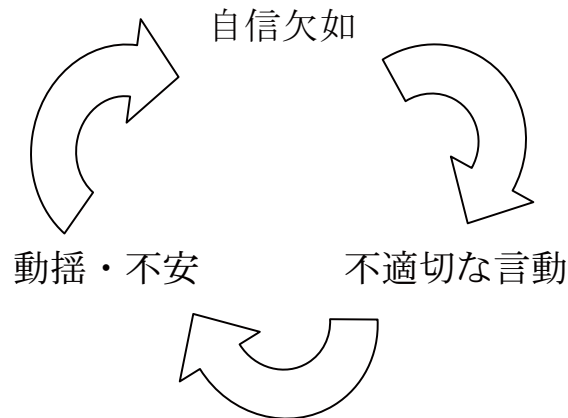


図2 コミュニケーション マイナスの循環

しかし、それぞれの段階に、ひとりひとりの人権＝セルフエスティームや、表現の基本的人権であるアサーション権の意識を回復させたり、アサーションのスキルを身につけることで、コミュニケーションのプラスの循環を図ることができる。（図3）

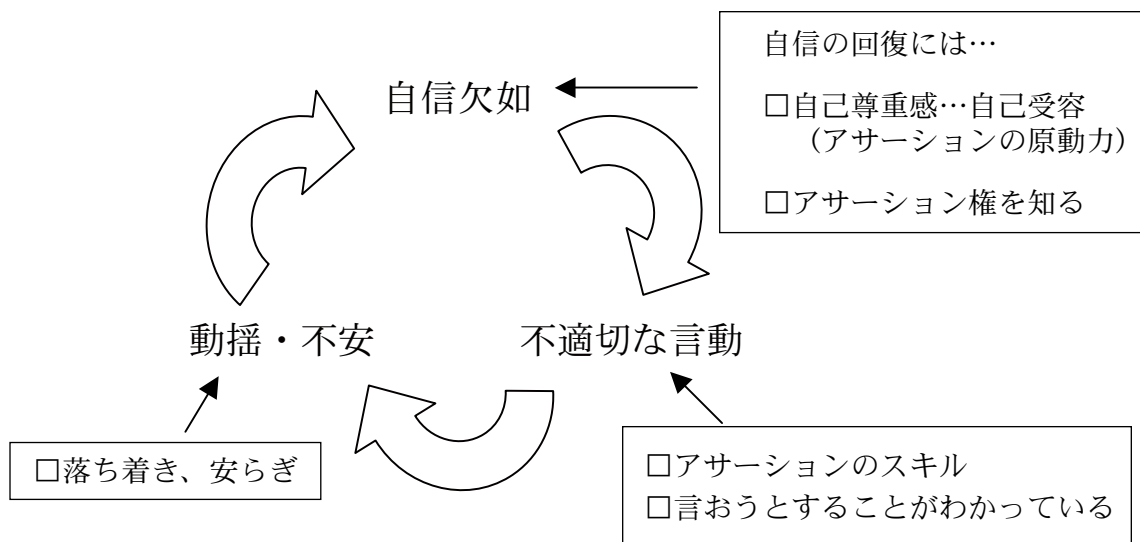


図3 コミュニケーション プラスの循環

2) 自分がとりがちなコミュニケーションのタイプを確認する

- わたし × / あなた OK

自分はいつも後回し 相手を優先 →非主張的 ノン・アサーティブ

- わたしOK / あなた ×

自分を優先し、相手を軽視するor 無視する。 →攻撃的 アグレッシブ

- わたし OK / あなた OK

自分をまず考えるが、相手も充分尊重する。 相互尊重 → アサーティブ

ワークを通して、具体的な場面で、どのような応答が、3つのタイプに該当するかを考えていく。

3) アサーション権を知る

「アサーション権」とは、自己表現に関する基本的人権を指している。権利を知っていることは大切である。知っている→使っていいと確信する→使う ことができる

自己表現に関する基本的人権

アサーション権を知る

- ◆誰でも、人間として、生まれながらに「アサーション権」があること。
- ◆誰でも、一人になりたい時、一人ですごしてよい。
- ◆誰でも、人より優れていたり、物事をなす上で成功してよい。
- ◆誰でも、罪悪感や利己的な感じを持たずに、依頼を断ってよい。
 - ▶「ノー」を言うことは、利己的でも、間違っていることでもない。ただし、相手から「ノー」を言われることもある。
- ◆誰でも、ほしいものを要求してよい。
 - ▶これは、4と逆のことで、したがって相手から断られることもあるが、要求してよい。
- ◆誰でも、過ちをし、そのことに責任を持ってよい。
 - ▶人間は完璧ではないから失敗することもあるが、その結果をひきうけることもできる。
- ◆誰でも、自己主張しない権利もある。
 - ▶時間やエネルギーの消耗、あるいは、危険性の点から、自己表現しないことを選ぶことも一つの選択肢である。
- ◆誰でも、まじめに聴き、受け止めてほしいことを要求してよい。
 - ▶自分の意見を言いたい時、見解を大切にしてほしい時、耳を傾けてほしい、と言ってよい。しかし、その結果が得られないときもある。

4) アサーションのスキルを知る

DESC法 問題解決の話し合いの仕方を知る。

相手まかせにせず自分から問題解決したいときに使う。

D = describe 事実を具体的客観的に描写する = 共通認識をつくる。

(状況の共通認識を持たないまま話すことによって混乱を生じている)

E = express explain 自分の気持ちを表現する・説明する 明確に 冷静に

『アイ（わたし）メッセージ』をつかう 「わたしは……思う」

（『あなたメッセージ』は使わない。）

S = specify 解決するための特定の提案をする 具体的に現実的なもの

C = choose 具体的・実行できる 選択肢を示す

2) ~ 4) により、自分がとりがちなコミュニケーションのスタイルを意識化し、アサーション権を知ったり、アサーション・スキルを身につけ、実践することで、コミュニケーションをプラスの循環にしていけることができる。何よりも、自分の気持ちに気づき、実際には、結果的に相手との間で問題解決がうまくいかなかったとしても、自分の気持ち自体は大切にできる。また、コミュニケーションのプロセスを主体的に進められることで、自分のことを大切にできた、という実感を持ちつつ、次の行動にのぞむことができる。

こうした「自分で決定し、その結果をひきうけていくこと」が主体としての自分をしっかりと確認できることにつながる。現在、日本社会で多くみられる女性にとっての性役割（人間関係において調整的・調和的・受身的であること）、男性にとっての性役割（責任感、リーダーシップ、感情を抑えて泣かないこと を求められやすいこと）のどちらにも欠けがちな、「自分自身の気持ちを大切にすること」に対して、アサーションでは第一義的に敏感になることができる。

6. 参加者の感想から

参加者は、アクティビティのあとのふりかえりで多くの「感じたこと」を言葉にしている。

第3回のジェンダーについてのふりかえりを概観してみよう。

- わたしたちはジェンダーについて、言われてイヤなことが多かったなら、子どもには伝えなようにしよう……と思えるけれど、わたしたちの親の世代はどうかだろう？と思う。自分の親も義父母も、めっちゃくちゃジェンダーにとらわれていて私たちの子どもに（まで）それを言っている。世代が総入れ替えしない限り、ジェンダーの問題はなくなる気がしません。
- （詳述はさけるが、現在、育児休業中で、職場復帰にあたり、悩んでいる記述もみられた。）日本の社会を変えられるように、（子どもの自尊感情を大切にあげて）自分の考えも大切に、生きやすいような環境をつくってあげたい。
- 主人は「おにいちゃんだから」「男の子だから」と育ててこられ、私は「お姉ちゃんだから」「女の子だから」とよく言われてきたので息子には言いたくなかったのに、時々言っている自分がある……。
- ジェンダーを学んで我が子をどう育てていこうか……と思った。男の子だから、女の子だから、ではなくその子自身を見つめてあげることが大事なのかな？自分自身もそう言われて育てている部分、利用してきたところがあると思う。国が変わっていかないと、ジェンダーも変わらないのかも。
- ジェンダーというのは根深い問題だと気づきました。DNAに組み込まれたように当たり前とらえている人が年齢に関係なくとてもとても多いと思います。

問題ととらえ、行動に移そうとすると、苦しむことが今でもあると思うけれど、自分の子どもたちが成人する頃には、その苦しみが少なくなっていることを祈るばかりです。その為に自分が何ができるか、考えていこうと思います。

- 頭で男女は平等だと思っていても、自分では思っている以上に、根本的な考えはジェンダーにとらわれていることが多いと思いました。年代的にも古いので、ここ10年で男女共同参画についてもものすごく変化していることに頭がついていっていないのかも、と思いました。自分の子どもは自分とは性別が違うので無意識に「男らしく」とか押しつけてる部分もあると思いました。もっと意識的に柔軟に接していきたいです。
- ジェンダーの言葉の意味も知らなかったが、あまり違和感なく聞くことができました。幼い頃からの環境も特に女の子だから、など親に言われることもなく、育ったので、いつも自分の中に平等という気持ちが強くて、女の子らしさよりも自分らしさと思ってきたので、もっとジェンダーについて知りたいなぁと思う様になりました。自分の子育てにもぜひ取り入れていきたい、と思いました。
- 性の違いに関して改めて考えてみて、意外と思いでいることも多いと感じた。女性だからこうしなくては、とか恥ずかしいとか感じることも多かった、と思う。実際、働いていたときも、女性の少ない業界だから、というのもあるが、女性はいつか辞めるというのを前提に担当が決まったりとか、女性だから接待はダメなども多かった。妊娠に関して会社内に保護する制度はあったが実際使用する環境をつくれなかったり、逆に妊娠してても変化なく働きたいという人でも、こういう制度だから、と制限されたり、と難しい問題だと思った。ただ、今までの歴史をみて、10年、20年前より改善されているのを知り、自分の子どもが親になったときに、さらに選択肢が増えていることを願います。
- このセミナーに参加しようと思ったきっかけは広告をみて「男の子の子と育てるにはジェンダー」という言葉がまず気になったからです。ただ、今日のお話を聞くまでは、男の子を男らしく育てるには……みたいな男女の育て方の違いを教えてもらえるのかな、とまさにジェンダーにとらわれた(?)勘違いをしていました。もう一度自分らしくをUnlearn(学びなおし)して選択しなおし、子どもにも、私が「いい子ども」像を押し付けるのではなく、自分で選択できる子にしてあげたいな、と思います。
- 今、育っていく子ども達の自尊感情を高めるためのお手伝いを早急にしていかなければ……と思っています。そして、自分の中にある“決めつけ”や“ジェンダー”についてもっと皆が意識できるといいな、と思います。
- 年表で今あたりまえだと思っている法律がずいぶん最近できたものだと知り驚いた。自分の子どもは「皆と同じだから安心」ではなく、個を認めるようにしたいとあらためて思った。いなかに戻ると女は台所、男はだんらん になっている(それが当たり前)の価値観とても息苦しい。

個人的事情にふれるものは、掲載をさけたが、多くの方々が、自らの環境や、育ってきた過程にひきよせて考えを述べておられる。ジェンダーというテーマに関して、遠いことではなく、自らにひきよせて考える機会になったことがわかる。また、社会の変化や自身の今後の行動化についても言及している。ジェンダーのテーマに関して、「当事者感覚」が増した、ということが言える。

最終回に、参加者に四択で講座の評価をしてもらおうと、【1. よくなかった 2. あまりよくない 3. まあまあよい (1) 4. よかった (13)】という結果だった。

また、記述について、下記4点で整理した。

【価値観の問い直し】

- ・心の中を深くみつめる機会というものはあまりないが、この4回で少し深めることができ、とても実りあるセミナーでした。
- ・人との関係について、こんなに考えたのは始めてです。良い経験になりました。この講座のおかげでもっとパートナーにやさしくなれそうです
- ・自分を見つめて知ることができた。難しくて頭の中がパニック状態になった。
- ・それぞれのテーマで気づきが多く、自分のことや、周りのこととの関係性の大切さや、あり方が少しわかりました。
- ・結婚、出産、育児を経験して、これまで考えなくてよかったことをじっくり考えたり、価値観を問われる機会が多くなった。自分の思いに気づいて、物の考え方が変わった気がする。
- ・「コミュニケーション」ってなんだか難しくとらえていたけど、聴くことや自分、相手を大事にすることを、まず、いつも大切にしたいと思った。

【ジェンダーを知って】

- ・ジェンダーについて、今まで男だから女だからとの考え方に否定的だと思っていたが、意外と無意識に決めつけていると認識した。きちんと時間をとって、自分の思いをあらためてわかるということは大切だと思った。
- ・印象的なのはジェンダーの内容。次世代に伝えたくない、と思いました。
- ・ジェンダー（歴史をふりかえる）“History”が印象的。
- ・ジェンダーについて大なり小なりの偏見があること

【講座のスタイル】

- ・講義形式が多いかな、ワークショップをもう少しやりたいな、と思っていましたが、終わってみると、知識と実践のバランスがとれて両輪よくまわるプログラムでした。

【アサーションを知って】

- ・最後の「アサーション」が興味深いです。これからこういったことを学んでいけば、自分がより生きやすくなるんだろうな、と明るい気持ちになりました。
- ・アサーション“共通認識をつくる”←画期的でした。いつも気持ちを先にぶつけてばかりだったので。
- ・アサーション権などを知ることができた。

各回のテーマに沿って、あるいは全体的に、自分の今までの価値観を再考する機会となり、様々な概念を知って、表面的なコミュニケーション・スキルではなく、社会の中で「自分がどのように生きていきたいのか」を考える機会となったようである。

7. 学習者の気づきを喚起するプログラムの在り方

4回連続の講座というのは、長いようで実は短い。第1回の仲間づくりを大事にしたのは、安心できる場づくりをしたかったからである。また、4回のプログラム全容を最初にガイドしたのも、全体の見取り図を了解した中で学びを進めていくことに安心感を持っていただきたかったからである。

各回のテーマに沿って、時には、ペアワークをし、4名のグループで話し合い、また、全体で発言をホワイトボードに整理しながら、それぞれの気づきを共有していった。安心できる場で、自分の感じたことを意識化し、メンバーの意見に触発されながら、さらに気づきを深めていけるように、ワークをしたあとに、〈話したり・書いたり〉の『ふりかえり』を大事にし、前回の「気づいたこと」は次の回に共有できるようにした。

また、講座の中であらわれてきた個人的な課題には、必要に応じて情報提供をし、今後、考えられそうな問題には、予防的にサポート先を紹介した。(個人的な問題は全体では扱わないようにしたが、ペアワークでできたものは守秘義務をしっかりと確認した。)

さらに、時間がたって、感じた印象が薄くなるのはやむを得ない場合もあるが、できるだけ学びが保持されるように、各回、具体的な資料をそろえた。(最後のアンケートをまちがって隣の人の分と2枚持ち帰ったある参加者は、「夜、ふりかえりをしようと思って、資料をとりだしたら(忘れた)アンケートを見つけました」とあり、それを郵送していただき、嬉しかった。ふりかえりを積極的にしてくださっていたからである。)

実は、この講座は、成人の学習者にとって、非常に重要な「学習者のニーズに沿うこと」について、最初にニーズを確認・具体化するなどの手続きをとっていない。しかし、【子育て中の親である】という特性にとって、このコミュニケーションというテーマそのもの、そして、その要素を構成するコミュニケーションの根幹を為す人権(セルフエスティーム)や、自己表現の基本的な人権(アサーション)が非常に高いニーズを持っていたことが推察される。

それは、子どもを育てる中で、必然的に、性役割をどう考え子育てに反映するのか、子どもの育つ過程でどう、主体性を育むか、子どもに向き合う際に、親としての自分がひとりの人間として、どう自身を大切にしていけるのか、など、様々に内面に問い直す場に直面するからである。

そして、コミュニケーション・スキルが単なる表面的なノウハウではなく、今の日本社会のあり方を考えざるを得ない面があり、子どもを育てている親として、大人の在り様、子どもの育つ環境に関心を向けさせる大きな意味をはらむテーマであったということが確認できるプログラムだったと思う。

今後はこのような学習者の特性を意識して、もっとも学びの臨界点とも言える時期に、もっとも関心の高いテーマに出会い、積極的な参加を喚起するようなプログラムデザインをさらに検討していきたい。

【参考文献、参考資料】

北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」情報紙『ムービング』VOL.58号

平木典子 日本・精神技術研究所『アサーション・トレーニング さわやかな自己表現のために』1993

NPO法人SEAN調査報告書『マンガ・雑誌の性情報と子どもたち』2008

森田ゆり 解放出版社『エンパワメントと人権』1998

平成18年度 ジェンダー問題調査・研究支援事業 報告書 『北九州市におけるデートDVの実態と意識に関する調査研究～より早い時期からの啓発・予防のために』